

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	柿葉 : 短歌・俳句
Author(s)	中原, 淳吉
Citation	龍南, 239 : 51 - 53
Issue date	1937-11-13
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7453">http://hdl.handle.net/2298/7453</a>
Right	

柿 葉

中 原 淳 吉

遙かなる水面傳ひて夕立は彼處の橋に襲ひかかれり

夕立の肺然として襲ひ來れば窓際にしてしぶき涼けし

つややけき柿の葉末に雨垂は夕陽に映えてしたゝり落ちぬ

夕立のたまれる水に點滴は卒然として波紋畫けり

點滴に水のゆらぎて黄金たつ波紋を玄關の磨りガラスに寫せり

人一人生命を賭けて兵士等は肅々として今日も出征<sup>で</sup>ゆく

どよめきに遠雷の如く迫り來て蹄鐵は舗道にカッ／＼と鳴る

留守隊の嘆きを託つ兵二人大聲あげて酒を飲み居り

長劍をひらけかして酒を飲む兵士ありけり眞夏の夕

霧深く舗道を行けば街角に乞食は襤褸を着て居たりけり

鈴蘭燈の淡き舗道に襤褸着たる乞食は霧を吸うて居たりき

星淡くほのかなる宵に提灯を子供四人聲高に歩く

たゞもう振りまわす提灯に赤い横顔に軍國の秋

遙かなる星を仰ぐ時万才のどよめき三度空にひびけり

静かなりしおもてを歸る聲三人提灯行列は終りたるらし

山遠し水面は廣しスカールは颯々と飛ぶ新秋の朝

爽涼の大氣を進むスカールの後へに長き淀み一線